

〔論 文〕

シルクロード学概論（Ⅰ）
——草原の民の文化とシルクロード——

高 橋 庸 一 郎

はじめに

今は余り言われなくなったらしいが、我々が中学校で、奈良法隆寺金堂の柱が、中太徳利型の柱であるのを、古代ギリシャ神殿のそれと結びつけて「エンタシス」と習ったものであった。このエンタシスという言い方を最初に提唱したのは、明治二十年代から三十年代にかけて活躍した当時の東京大学教授であった伊藤忠太¹⁾である。しかし彼は、古代ギリシャ神殿の建築様式が、遠い東洋の日本にまではるばる渡って来て、それが法隆寺の金堂の柱に影響を与えたのであると謂うことを、伝播の過程を明らかにしながら地理的論理的に証明したわけではない。

ずっと後になって和辻哲郎²⁾が『古寺巡礼』等の著作の中で何度もこの事に言い及んだために、日本では法隆寺とエンタシスが直接結び付けられて、恰もセットのように語られるようになっていたようである。

結果、古代のヨーロッパ・ギリシャ文明が日本にまで伝わってきたと謂う言い方は、此れも第二次世界大戦後、まもなく日本人の口の端に登るようになった「シルクロード」の語と結びついて「シルクロードは西洋文明と東洋文明を結びつける大道であるが、この道の終点は日本奈良の法隆寺である。」といわれる所以ともなったのである。

「シルクロード」という語を最も早く使ったのはドイツの地理学者フォン・リヒトホーフエン³⁾であるといわれている。リヒトホーフエンは、1868年8月から十数年に亘って中国大陆をくまなく踏破調査したのである。其の成果は1876年ベルリンで刊行した『支那』(Ferdinand von Richthofen, China.) (日本では昭和十

七年、東亜研究叢書刊行会蔵版として岩波書店が刊行した。)の中で、「ザイデンシュトラゼン」と呼んだのを、イギリスの探検家スタイン⁴⁾が「シルクロード」と称したのである。中国特産の絹、或は絹織物が中国本土から中央アジア、西アジアなどのオアシス都市を結んで、イラン、インド、ローマにまで運ばれた。その道をシルクロードというのである。

リヒトホーフエンが「シルクロード」と言ったのは、中央アジアと中国、特に長安との間を結ぶ絹織物貿易ルートを指したものであった。しかし時代が降るに随ってそのルートの実態が徐々に明らかにされるようになり、更に延長し拡大されて理解されるようになったのである。その結果シルクロードの西方は中央アジア、東欧を通り越してローマにまで至る事になったし、東方は中国の東北をや朝鮮半島を通り越して大和奈良にまでいたることになったのである。ただその「道」は極普通に言われるシルクロード以外に、「草原のシルクロード」、「オアシスのシルクロード」、「海のシルクロード」などと呼ばれる幾種類かのルートがあるとされるようにもなったのである。ここではその一つ一つについて細かく考えるのではなく、全体として大雑把な範囲で「草原のシルクロード」を考え、大雑把な範囲での「オアシスのシルクロード」を頭に置いていただきたいと思う。それは古代日本文化と中央アジア、西方文明の関係の中で考えると、古代東西文明の交通路として重要なのは何と言ってもやはり草原・オアシスのシルクロードであったはずだからである。

またシルクロードは絹織物、陶器などの目で見ることの出来る物品の交易ルートとしての役割とともに、目に見えないもの、風俗や習慣、言葉、考え方等の交流にも大いに活用されてき

たはずである。そこで、今回はこれ等目に見えないものの交流の足跡を辿ってみたいと思う次第である。

I モンゴル族の故郷、陰山山脈とアルタイ山脈の西斜面

民族学については詳しくないので、余り口幅ったい事はいえないのであるが、世界の民族を分けるのに、よく三つの分け方をしようである。それは①コーカソイド、②モンゴロイド、③ネグロイドである。依って我々は普通、白人種とアジア人種というのは全く違っている人種であると認識されている。しかし所謂シルクロードに沿って中央アジアを旅していると、時々人種の問題で戸惑いを感じるような場面に出くわすことがある。それは特に新疆省のウルムチやカシガル⁵⁾、或はタシクルガンを巡っている時であるが、この辺りは地名にも「新疆ウイグル自治区」と名前がついているように、住民の多くは所謂ウイグル人である。ウイグル人の特徴は大雑把に謂うと、髪が赤く、顔の皮膚もやや赤みを帯びており、目は茶色である。おそらく彼等はコーカソイドに属するであろうし、言葉の上からもトルコ系に属するのであろう。それでも所謂「白人種」とは少し違っているようである。タシクルガン⁶⁾はタジク語で、「タジク人の住むところ」の意味であるらしいが、多くの人々はアラブ系に属する風体である。アラブ系の人はおそらくコーカソイドに入るのであろうが、此れも白人種とは異なっている。髪は黒か茶色で、巻き毛である。肌は基本は白いが全体的には黒ずんでおり、目は黒くてくぼんでいる。鼻の下、顎から頬にかけて髯が濃く、顎がしゃくれて見える。といった具合である。しかしこうした人々の生活圏の中にはモンゴロイドもいて、その中には漢民族もいるのであるが、中にモンゴル族の間人もいるばかりでなく、よく聞いてみると彼等の中には、はっきりと、自分はウイグル人であるという者もいるのである。そういえばフフホトのモンゴル人の私の友人の奥さんは、純粋なモンゴル人であり、タルクト人⁷⁾でもあるが其の風貌はいかにもウイグル人である。こうした例には他にも何人

か会ったことがある。

しかしこうした状況はそんなに不思議ということではないのかもしれない。何故なら考えてみると、モンゴル人の故郷はフフホト⁸⁾の北側からパオトウ⁹⁾の北にかけて横たわる、陰山山脈の西斜面であり、ウイグル人の故郷もほぼ同じこの辺りであるらしいからである。つまり中央アジア、西アジアではモンゴル人もウイグル人も、其の出自は元々はほぼ同じ地域である。するとこれ等の民族は、長い長い時代の変遷と広範囲な地理的な点も含めて融合と離散を繰り返すうちに共に互いに顔かたち、言葉や、宗教などが異なってきたのであろう。また文化的な要素は全く違っているかのように見えるが、しかし大本にはそれぞれ互いに受け入れあう事のできる要素が基本的に存在していたということなのであろう。つまり大前提として、シルクロードとはこうした共通の下地の上に存在し、築かれたルートであると謂うことを忘れてはなるまい。

II モンゴルの葬送と日本の葬送

沖縄・久高島には古くから「風葬」と言われる葬送の方式があった。其れは亡くなった人の遺体を、かなり長期にわたって、岩陰や洞窟の中に放置して置くのである。そしてある程度時間がたってから、つまり遺体が腐蝕して原型が識別出来なくなった頃に、再びそこに行って骨を拾い、水で綺麗に洗ってから清め、其れを壺に収めて、其の壺をお墓に埋葬するのである。或いは其の壺をそこにそのまま置いておくというものもある。いずれにしてもこの場合の前半はオルドス・モンゴルのそれによく似ている。つまりモンゴルの風葬は正しく 風のまにまに…… であり、人の手が一切介入することがないのである。

世界のどんな民族でも人の死を厳粛に考えることに変わりはない。ただ其の「厳粛」をどのように表すかがそれぞれ異なるのである。其の表し方に最も特徴のある事例をここでは二例挙げて解説を加え、更にそうした文化の根底を探ってみたいのである。

中国内モンゴルの呼和浩特(フフホト)から包頭

（パオトウ）を経て、東勝（トンション）¹⁰⁾のチンギスハンの陵¹¹⁾（成陵）に向かう途中にある「四つの赤い所」と言われている場所が、オルドス・モンゴル族の喪葬の地である。それは低い松などの低木の生えた砂地で、遺族は死者を背負うか担うかしてこの「赤い所」の砂地の少し低くなった窪地に運び、衣類をすべて剥ぎ取って、そこに埋葬するのではなく、ただ置く、放置するのである。是をモンゴル語では「ハイインナ」と言う。「捨てる」の意味である。遺族は其処に遺体を置き去りにしたまま、帰って行き、互いに酒を酌み交わしながら、故人の思い出などを語って夜を明かすのである。彼等はあの砂地を再び顧みることないし、花を手向けに行くことも無い。本当の意味で、遺体を「捨てた」のである。遺体は、其処が窪地であることもあって、砂が風で徐々に崩れ落ちてやがて砂に埋まってしまうのである。そして腐敗し、骨は細くなり、其の辺りに散乱して、其のうち「土に返る」のである。時には遺体が狼の餌と成ることもあるし、秃鷹の啄ばむことになることもあるという。私が内モンゴル・フフホトの内蒙古大学に滞在していた時、2002年のことであるが、内蒙古医科大学に、ある女性が遺体を売りに来たというので話題になった。大学では丁度その時解剖用の遺体のストックがなかったために、この女性から何体かの遺体を買ったのであったが、それが大学の教授会で問題になったというのである。つまりその女性は、その遺体をどこから持ってきたのか、ということが問題になったのであった。その女性は、遺体を例の「四つの赤い所」から持ってきたというのであった。「捨ててあった遺体」を持ってきて有効利用するのにどこが悪いのか、というのが女性の言い分であった。日本ならば定めし警察沙汰となるであろうが、ここ内蒙古では、若干のすったもんだの後、女性が遺体の遺族を捜して一言了解を取り付けてくる、ということだけでけりがついたのであった。この女性が本当にその遺族を捜し出して了解を得たかどうかという、後のことは大学は関知しないという事であった。こうしたことを考えると、遺体は本当に捨てられたのであった、ということがよく解るというものである。

というわけで、蒙古族は所謂墓というものを造らない。故に上に述べたチンギスカン陵というのも実は本当の墓ではない。新中国成立後、この地出身のモンゴル族の中央委員であったウランフの建議により中央人民政府が作ったものなのである。

今からかれこれ二十年ぐらい前のことになるであろうか。テレビで、「チンギスカンの墓を探す」というような内容の番組があった。いたって興味本位だけの番組ではあったが、オルドスを中心に大仰な地下探知機などを持ち込んで、此处でもない、あそこでもない大勢のスタッフが、草原を動きまわるのであった。もしチンギスカンの墓が見つければ、其処にはきつと唸るほどの金銀財宝が埋まっているに違いないというわけである。しかし今回これらの努力は残念ながら、しかし実は当然ながら報われなかった。しかし其のうち再度挑戦して必ずや探し出してみせる、ということを、スタッフ達の最後の言葉として、この番組は終わっていた。

さて日本の古来の伝統的習慣では、亡くなった人は、其の遺体を土に埋葬するのである。つまり土に埋めるのであるが、これは天皇としては実は持統天皇から始まったといわれている。『続日本紀』『文武天皇紀 大宝三年十二月』の条に、

「癸酉、從四位上當麻真人智徳、諸王・諸臣を率ゐて、太上天皇（持統天皇）に誅奉る。諡たてまつりて大倭根子天之広野日女尊と曰す。是の日、飛鳥の岡に火葬す」

とあるのがそれである。そして一般庶民場合もこれと略同じ時期で、700年に僧道昭が遺言によって火葬されたのが最初であると、これも『続日本紀』に記されている。これ以降仏教信仰の浸透に従って、火葬が普及していくのである。

日本語では、土葬にしる、火葬して骨だけになったものであるにしる遺体を土に埋めて供養することを「ほうむる」と言う。

「ほうむる」（葬る）の古語は「はふる」或いは「ほふる」である。

『日本書紀・綏靖天皇紀』に、「特に心を喪葬

の事に留めたまへり」とあり、この「喪葬」を『日本書紀私記』に、「美波不利（みはふり）」と読んでいる。

『万葉集』199番 人麻呂の長歌に、

「百済の原ゆ 神葬り 葬りいまして あさも
よし 城上の宮を 常宮と……」

とあり、この「葬り」も「はふり」或いは「はぶり」と読まれている。

「はふる」「はふる」は、「溢れる」の転じた語と言われ、「打ち捨てる」「投げかける」の意味にも用いられている。上着を「羽織る（はおる）」、名詞の「羽織（はおり）」の語源でもある。この古代日本語は、現代大阪弁の「ほる（捨てるの意）」の語源でもある。

『古事記・允恭記』に、

「王を島に放らば 船余り い帰り来むぞ……」

とあって、最初の句は、漢字で、
「意富岐美哀 斯麻爾波夫良婆」

と表記されている。この「放らば（はふらば）」は、「打ち捨てる」、即ち「島流しにする」の意味である。

現代日本語の「葬る（ほうむる）」は、如何にも丁寧に土中に埋葬するかのような意味合いに聞こえるが、元を正せば、つまりは「打ち捨てる」の意味であって、モンゴルの場合と全く同じなのである。

江上波夫が言うように、原日本人が騎馬民族として大陸から渡ってきたのであれば、其のときは恐らくまだ死者の遺体は、そのままどこかの砂地に打ち捨てるという風俗を持っていたに違いない。その風俗が近年に到るまで久高島では残っていたということであろう。シルクロードなどという言葉が生まれるずっとずっと以前遠古の時代、おそらくこのルートをたどって原日本人がこの列島にやって来ていたということの証の一助となるのではなかろうか。

ここでは直接関係のない話であるが、いまオルドス東勝に堂々と立っている、豪壮なジンギスカン陵とは具体的には何を祭っているのでは

ろうか。ということが気になる。実は1960年代の前半までは、ここにはチンギスハーンに残した馬具や武具、衣類、日常生活に使われた食器などの日用品などが収納されていた。しかし文化大革命が始まってから以降、多くの紅衛兵がやって来て「毛主席のものより、チンギスハーンの遺留品を大事にするのはよくない」ということで、十数箱あったもの（その中のいくつかの箱は、おとりの箱で、全く関係の無いものが入っていたといわれる）、全てを担ぎ出し、持ち去ったという。しかしその後それらの箱がどうなったのかは杳として分からず、いまだにそれらの箱の一つとして戻ってきていないという。ゆえに今は此の壮大な陵と建物の中には後につくられた像と織物の絵がかけられているのみである。

Ⅲ フォーリンウイングル

オルドスのモンゴル族の間に親しまれている芸能に、フォーリンウイングルと呼ばれる歌語り芸がある。これは馬頭琴などよりも少し大きい四弦の楽器を爪弾き、或いは時には弓を使って弾きながら、それに合わせて、物語を謡い、唸り、語って聞かせるものである。この弾き語りの内容はいろいろあるが、チンギスカンの英雄活躍物語などが中心である。しかしそれ以外にもそれぞれの各地方に伝わる英雄物語や人情物語、悲恋物語、頓知物語、世話物語り等も結構多いといわれている。それらを一人の語り師が、スーホという楽器の音と調子に合せながら、草原のテントに集まって来た遊牧の聴衆に唸って聴かせるのである。私はこれを内モンゴルの通遼というところからカンジカと言う小さな町に車で移動したとき、ラジオから流れてくるこの地方のラジオ局の放送で聞いたのであるが、その時ある種の衝撃を受けたことを今でも忘れがたい。つまりこのとき聞いた語りの、音色と言ひ、調子と言ひ、その語りの醸し出す雰囲気、私が子供の時に、その内容はほとんど憶えてはいないが、慣れ親しんだ曲調に突然出くわしたという感じを受けたからである。その曲調とは、所謂「浪花節」或いは「浪曲」の曲調のことである。

カンジカ¹²⁾ からフフホトに帰って来てから、内蒙古大学の先生のおついでで、フフホトでは今はもう数少ないといわれるフォーリンウイングルの一人の語り師にお会いすることができた。彼は六十才ぐらいの老人で、フフホト郊外の簡素な2DKのアパートに、奥様とお二人で住んでおられた。彼はここで何人かのお弟子さんにフォーリンウイングルを教えて生計の一助としていたということであった。またこの語り師から、幸運にも何曲かの語り物を聞くことができた。ただ残念なことはこの時も、その語られた内容はほとんど理解できなかった。その理由は第一に、私のモンゴル語の能力がまだまだそれらを理解するには至っていなかったということである。もう一つは、これは後で他の人に聞いてわかったことであるが、こうした語り調のモンゴル語は一種独特の発声法や癖があつて、今の若い人や、これにあまり慣れ親しんだことのない人には現地の人であっても、聞き取ること自体が難しいということであった。しかし短い時間ではあつたがこの時初めてゆっくりとフォーリンウイングルを聞き、その浪花節にも似た雰囲気をも十分に堪能することができたのであつた。

実は私は今からかなり前、所謂北京で天安門事件の起こる前の年であるが、ここ内モンゴルの地を訪れたことがあるのである。その時は陰山山脈を北に越えてウラントク¹³⁾ の大草原に行ったのであるが。この時はモンゴル族の青年が二人、案内役として同行してくれたのである。この二人はとても歌がうまくて、草原の高台に点在するオボに来ると必ずその地方の歌と思われ、民謡らしきものを大声で歌ってくれるのであつた。二十年も前のことではあるが、実はこの時の歌にも衝撃を受けたのである。即ちこの時彼らが歌ってくれた歌は、ほんとに素晴らしい、日本の民謡によくある「こぶし」がよく効いていたからである。私は音楽的才能も知識も全くないに等しい人間であるが、それまで聞いてきた世界各地の民謡などで「こぶし」を効かせて歌うというのにはあまり聞いたことがなかったのである。日本の歌文化とモンゴル族の歌文化との間に何らかの共通性と関連性があるのではないかと考え始めたのはこの時からであ

る。

いまフォーリンウイングルを聞いて、ここにも日本の浪花節と似ているところがあると感じたのはあながち偶然ではないのかもしれないと考えるのである。

フォーリンウイングルに聞き入るカンジカのモンゴル族のお年寄りたちの熱心で楽しそうな姿は、嘗て日本でも見られた懐かしさを彷彿させるものがあつたのである。嘗ては下町の風呂屋で、手拭いを頭にのせ、それこそ茹蛸のように真っ赤な顔をした老人達が、目を半眼に閉じて、さも気持ちよさそうに、唸っていたものであつた。また周りでそれに聞き入る人々もこの上なく気持ちよさそうであつた。それが浪花節である。

日本で浪花節がいつごろから、どこで始まったのか等ほとんど知らないが、起こりは鎌倉時代頃からであろうと言われ、その前身は説教節であろうとされている。この説明が本当に確かなものであるかどうかははっきりしないが、いずれにせよその説教節が如何なる経緯を経て浪花節にまで至ったのかは確かめる術が今のところない。それに管見ではあまりこの点の研究はされていないようである。そして今現代、誠に残念なのは、その浪花節という芸そのものが滅びようとしているかに見えることである。

日本で、戦後すぐの、娯楽というものが他に何もなかった時代には、浪花節を聞くということは、当時の大人たちにとって、結構大きな楽しみであつた。ラジオをつければ、いつもどこかの局でやっていたものである。その後やがてテレビの時代が始まると、テレビでも羽織袴の浪曲師たちが浪曲台を前にして、手には扇子をもち、額に青筋を立てながら唸っていたものであつた。しかしやがてその浪曲もあまり聞かれなくなり、浪曲師たちの中には、浪曲の「こぶし」を活かして歌謡曲の歌手に転じるものが現れたりして、結局は浪曲はすたれ、ラジオ、テレビなどでは全く聞くことができない現代という時代にまで進んで来てしまったのであつた。

方や、モンゴル族のフォーリンウイングルも実は何時ごろ始まったのか、これもはっきりしない。ただの推測にすぎないが、フォーリンウ

イングルの演目の中にチンギスハンのものが結構多いということを考えれば、どうもその始まりは、フビライが元朝を開き、失敗したとは言いながら大挙してに日本に攻めて来た、文永の役、弘安の役より後のことではないかと考えられる。このような戦役的な接触、交流を通じて、互いの戦闘員や捕虜、あるいは同行していたかもしれない僧侶らを通じて何らかの文化的な契機がもとなつて日本に説教節、或いは浪曲の基となるようなものが生まれることになったのではなかろうか。

中国の中で大多数を占める漢民族にとって、五十五もある少数民族の中の、モンゴル族という、一少数民族の、しかもそれも庶民の余り芸術的であるとは思われていない大衆庶民芸能を研究することは、そんなに意義深いこととは思われていないらしい。その為か中国でもあまり研究されていないように見受けられる。

モンゴル族の間でも、最近の若い人々は、世界的な時代の流れの例に漏れず、西洋的で新しいものには心を惹かれるが、片田舎的なうらぶれた、すたれつつあるような伝統芸能には聞く方も、唸る方にもあまり魅力を感じないらしい。

その意味では、日本の浪花節も、モンゴル族のフォーリンウイングルもほぼ同じ運命を辿っていると考えて間違いないであろう。

そのうちいつか日中双方で研究がすすめられるというようなチャンスが到来すれば、モンゴル族のフォーリンウイングルと日本の浪花節、浪曲は、どこかで関連があるということが解るのではなかろうか。もしそうだとすると、此処でもシルクロードによる恩恵を考えなければならぬかもしれない。

Ⅳ 『ジャンガル』 とシルクロード

オイラート・モンゴル¹⁴⁾、或いはカルメイック・モンゴル¹⁵⁾の英雄叙事詩に、『ジャンガル』¹⁶⁾というものがある。この叙事詩は二十万詩行あるとされている。これは明代になってから、不完全ながら、十三章本¹⁷⁾として一書となったのであるが、実はかなり古い時代から、ジャンガルチー¹⁸⁾と呼ばれる語り師達によつ

て代々語り継がれてきたのである。いつ頃からその伝承が始まったのか、つまり此の物語の大体の姿骨格が出来上がったのはいつ頃なのかは、あまり定かではない。今言われている成立年代は、十三世紀よりは以前であろうということだけである。その理由のもっとも大きなものは、この英雄叙事詩にはチンギスハンの影が全く出てこないという点である。モンゴル族のチンギスハンに対する尊敬、畏敬の念は並のものではない。よって十三世紀以降にこの叙事詩が作られたのであれば、チンギスハンの影を濃厚に引きずっているはずだからである。

此の物語の内容がどんなものであるかを些かでも推察できるように、其の目次を、平凡社・東洋文庫、若松寛記から、いくつかの章を抜粋してみると次のようである。

序歌

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| 第一歌 | 千里眼アルタン・チェージのジャンガルへの服属 |
| 第三歌 | 紅顔ホンゴルとハラ・ジルガン・ハーンの決闘 |
| 第四歌 | 紅顔ホンゴルのマンナ・ハーンに対する勝利と後者のジャンガルへの服属 |
| 第七歌 | 天下の美男子ミンヤンによる強豪キュルメン・ハーン生け捕り |
| 第八歌 | 剛直色黒サナルの妖怪国征伐とその国のジャンガルへの服属 |
| 第九歌 | 鉄腕サバルのキルガン・ハーン征伐と後者のジャンガルへの服属 |

・ ・ ・ ・ ・

もちろん此処からだけでは各章の内容を理解することはできないが、

ここから此の物語のいくつかの特徴を推し量ることが出来る。

- ① ジャンガル麾下の、それぞれ特徴ある部下が、一人ひとり独立した英雄として活躍する。
- ② それが一話として銘銘伝として語られる。
- ③ 戦う相手は「妖怪国」ともあるように、実際の史実とはかけ離れた形で話が、作られている。
- ④ 総ての話は英雄ジャンガルの元に収斂され

る。

此の話は十三世紀以前の成立といわれているが、十三世紀初にはモンゴルの史実としての英雄ジンギスカンの活躍があった。ということは、些かくり返しになるが此の話がジンギスカン以降であるなら、恐らく実際の史実としてより魅力に溢れたジンギスカンの話が混入しているはずである。しかしここには其の影を見出すことが全く出来ない。つまり此の英雄叙事詩『ジャンガル』の成立は当然ジンギスカン以前ということになるであろう。

漢族、羅貫中の『水滸伝』は元末明初、十四世紀半ばの成立である。この『水滸伝』も宋江麾下の英雄たちの銘銘伝からなっていることを考えると、これは約百五十年前、明の都、京師と同じ処に、大都と名付けて都を置いていたモンゴル族の英雄叙事詩『ジャンガル』を下地にしていたのでは無からうか。

此の『水滸伝』は後、江戸時代の日本に入り『本朝水滸伝』などと呼ばれる多くの講談本に取り入れられたのであるが、それが最終的には、四十七士の銘銘伝を持つ『仮名手本忠臣蔵』に収斂されることになるのである。

結局モンゴル族の英雄叙事詩『ジャンガル』は日本の「英雄」講談『忠臣蔵』にまで、その影を引っ張ることになるのである。

ここではこの問題を些か安易に語ってしまった感が否めないが、実際にはもっと時間をかけ、推敲を重ねて、もっと実証的な論理を展開して、その結果として結論付けるべきであろう。

ただこの三作品『ジャンガル』『水滸伝』『仮名手本忠臣蔵』はそれぞれの民族で、自国の或いは自民族の誇るべき歴史的な自立的な作品としてあまりに強く自認されているために、他民族のあるいは他国の文化的な影響下にあったとは認められがたいことも事実であろう。

しかしシルクロードというアジア大陸を東西に貫通する文化的な大道を考える時、この問題はやはり何時かは、そして一回はつ通らねばならない難関であろう。そして今ここでその問題に拘泥するべきでないと考えるので、次の機会に論じることにはしたい。

今アジア大陸を東西に貫通する文化的な伝播ルートとしてのシルクロードを考える時、このルートに纏わる問題はほとんど解決していないということがわかるし、そしてその問題となるべき課題そのものがまだまだ発掘されていないということが解るであろう。

多くの人々が住み、多くの民族が行き交い、多くの文化が根付き、発展して行ったにも関わらず、何故かくも解らないことが多いのか。その最大の理由はここに生きた人々は、その歴史のかなり遅い時期まで文字を持たなかったという民族が多かったということ、たとえ文字をもつことがあったとしても自国、あるいは自民族の文化を書き残すということをしなかったということであろう。しかしそういうことをしなかったという事が彼らの独特の歴史を形成することが出来たのである、と考えるなら、それはそれで極めて興味あることといえるであろう。

注

- 1) 慶応三年、山形県米沢出身、工学博士 東京帝国大学名誉教授、早稲田大学教授 法隆寺が日本最古の寺院建築であることを提示した。また「建築進化論」を唱えたという。明治二十六年「法隆寺建築論」を発表。昭和二十九年逝去。享年87歳。
- 2) 1889年兵庫県神崎郡に生まれる。第一高等学校卒業、後藤末雄、谷崎潤一郎らと同人誌、第二次「新思潮」に参加。1912年東京帝国大学哲学科を卒業し、同大学院進学。1919年「古寺巡礼」出版。東洋大学講師、法政大学教授、京都帝国大学教授、東京帝国大学文学部倫理学講座教授。1960年逝去。
- 3) 1833年ドイツのオッペルンに生まれる。1850年から56年までプレスラウおよびベルリンの大学で学ぶ。1856年世に出て、ヒマラヤ、チロル地方の地層研究、岩石研究に携わる。1868年から中国調査を行う。それは「支那日記」に詳しい。またこの間日本にも立ち寄り1868年八月から九月までの日本での印象はきわめて興味をそえられる。ボン大学教授、ライプチヒ大学地理学教授、ベルリン大学地理学教授を歴任し、「東アジア地体構造論」などを発表、1905年72歳で逝去。
- 4) イギリスに帰化したハンガリーの中央アジア探検家。1862年ハンガリー、ブタペストにユダヤ系ハンガリー人として生まれる。ドレスデン大

- 学, ブタベスト大学, オックスフォード大学, ロンドン大学などに学ぶ。1900年東トルキスタン探検調査を行う。新疆省, ホータンのニヤ遺跡を発掘調査, 敦煌の仏画, 仏典, 古文書類を持ち帰った。「砂に埋もれたホータンの廃墟」白水社, 「コータン (ホータン) の廃墟」中公文庫などがある。
- 5) 新疆ウイグル自治区では二番目に大きい都市。ウイグル人が60%以上であるという。
 - 6) 新疆省の中でも最も西に位置する町, タジク族が多くすんでいる。ここの住民たち, 特に女性はほとんど常に民族衣装を身に着けている。町を歩くと, ほとんどの住民が挨拶をしてくれる。非常に気持ちのいい町である。
 - 7) チングスハーンが, 自分の身辺を守るために, 500戸を選んでその警備に当たさせた。彼らはチングスハーンが死んでからも, モンゴル族の内部で, やや独立的な地位を守り, チングスハーンの遺留品を携えて, 日本軍, ロシア軍, 国民党軍から自分たちの権益領土と地位を守り通したという。タルクト人は二十世紀半ば過ぎまで実際に存在し, 今なお一年に何度かのチングスハーンを祭る儀式を行っているという。
 - 8) 現在, 呼和浩特と表記されている。蒙古自治区の区都。今は大都市。内蒙古大学, 内蒙古工业大学, 内蒙古医科大学などがある。
 - 9) 現在, 包頭と表記されている。内蒙古では二番目に大きな都市。軍事工業が最も盛んな工業都市。しかし公園も多く, 緑にも恵まれている。
 - 10) 東勝と表記されている。オルドス地方の最も大きな都市。ここにチングスハーン陵がある。またこの町には今でも多くのタルクト人が住んでいる。
 - 11) オルドス地方, パオトウから南へ約百五十キロのところ東勝にある。風水によって, 非常に良い条件を備えていると言われる丘の上に, モンゴル族のテントをかたどった三つの大塔を横に並べた豪壮な建築物がたてられている。
 - 12) 内蒙古自治区の中でも東の端, 吉林省長春に近い所に通遼という町があり, その近郊にある比較的小きな町。
 - 13) フフホトから北に百キロほどの所に武川という町があるが, この町からさらに北に百キロほどの所に広がる大草原。付近に小さい村があるが, ここには家畜の水飲み場もあるため多くの遊牧の民も集まりやすいので, モンゴル族の祭り, ナードムなどもここでも行われる。
 - 14) 同じモンゴル族と言われていても, いくつかの分支に別れており, オイラートモンゴルはオルドス地方に依拠していたモンゴル族。
 - 15) ソ連邦時代に, ソ連のカルメイック共和国のあったところに依拠していたモンゴル族。
 - 16) 漢字では, 「江格爾」と表記される。モンゴル族の人々にこよなく愛されている英雄叙事詩。中国の少数民族にはそれぞれ英雄叙事詩を持っているものも多く, 有名なものでは, チベット族の『カサル王伝説』, キルギス族の『マナス』など。
 - 17) 1911年ハジトニエーネフが演唱した「ホンゴル, シーラに出征す・モッコス」など三章と, 1908年にロシアの大学に学んでいたカルメイックモンゴルの学生, ヌオモト・アオチルが彼の故郷であるアスタラハンでトルボトが記録した, ジャンガルチーのウリアン・アオフラの演唱した十章の「ジャンガル」とを合わせて, 十三章としてモンゴル語で出版したもの。
 - 18) ジャンガルは蒙古族の, 本来口頭で伝承されてきた英雄叙事詩である。そのためこの叙事詩を伝承するために, 代々伝承してきた家系があったと思われる。近年は師匠と弟子という関係で伝えられているようであるが, この口頭で聴衆に伝承を話す語り師を, ジャンガルチーと呼んでいる。チベット族の英雄叙事詩『カサル王伝説』の語り師はカサルチーと呼ばれ, キルギス族の英雄叙事詩『マナス』の語り師は, マナスチーと呼ばれる。

(2011年7月1日掲載決定)